

御霊に、何と言ってよいか御遺族の方々の前へ出るのも憚られる苦しさを味わったものです。

いずれにせよ、兄弟三人揃って元気に復員できたことは、この上ない目出度いことで、神様の、母のお陰であるから、お札の意味で氏神様へちよつとまじまつた寄付をいたしました。

現在、男三人、女二人の五人の兄弟と姉と全員健在で、長姉は米寿を日度く迎え、年一回皆で揃って旅行を楽しんでおります。孫は内孫、外孫合わせて七人すべて健在です。以上の親族皆それぞれ努力をしてよい生活に恵まれています。

戦争は二度とあってはならないと深く考えますとともに、今日まで元気で幸せに生きていられること、有り難い極みであると、心の底から考えます。

中支から仏印への戦い

新潟県 渡 邊 賢 次

私は、大正二年二月二十日、現住所で生まれ、父が自営業でしたので、六歳のころから、近くの神社横にある井戸へ水くみに行かせられるなど、家事の手伝いをさせられました。まだ、電灯がなかった時代ですから、「ランプ」の「ホヤ」の掃除も私の仕事で、「ホヤ」を割ったりしたら「げんこつ」をもらい、買いに行かせられたりしたものでした。近くの堀池で鮎釣りするにも手作りの釣竿や古い網を探して使ったりしました。

学校も小学校止まりが普通でしたが、私は親が面倒みてくれまして高等科に通わせてくれました。雪の日は当時ですから、げたか足駄でしたので、雪がくつき、時々落としながらの通学をしたものです。途中で鼻緒が切れたりすると、藁くずを拾って鼻緒をたて、学校にたどりついたこともありましたが、冬なんかは手がかじかんで困った思い出があります。

弁当のおかずも大体が納豆、油揚げ、味噌漬、たくあんと決まっていましたね。

教室には火鉢があり、ブリキ製の弁当棚に下から一

年生、二年生とだんだんに載せて、六年生は一番上に入れて暖めるようになっていました。六年生の弁当は冷たかったのですが、一年生のは暖かい。当時の上級生の下級生に対する思いやりが懐かしいです。

父は四十九歳で亡くなりましたので、野菜や魚の行商を、兵隊に行くまでやっていました。汽車に乗り、津川、鹿瀬、白崎、野沢方面にも行商し、昭和十四年に結婚し、子供も二男一女をさずかりました。

兵隊検査は、昭和四年です。甲種合格でしたが、クジ逃れでした。

軍事教練は受けましたが、満州事変が始まり、上海事変になっても召集はなかったですね。

昭和十八年六月一日、新発田の歩兵第十六連隊に入隊、下関から朝鮮にわたり、貨物列車に乗せられて着いたのが上海近郊の浦口県城駐屯の中支派遣軍原第七九三六部隊第三中隊（小野大尉）です。古年兵は長野群馬、栃木出身の現役兵で二十二歳、こちらは新兵だが三十一歳の召集兵、軍隊でもの言うのは飯の数ですから、イヤイヤられましたね。酷かったですよ。一期

の検閲まで毎日毎日演習で、着弾筒扱いの教育ですが、途中で足を負傷して小銃班に変わりました。演習が終われば銃剣術の練習で絞られました。

内務はピントの連続、苦痛の連続ですが、強い兵隊になるためだと自分に言い聞かせて辛抱しました。

検閲後、分哨派遣で二階建てのトーチカ警備に出され、状況の悪い地域らしく、中隊には山砲四門が配備されていました。

ある日、共産軍の襲撃を受け、初めてチェコ機銃の軽快な発射音を聞き、緊張と同時に激しい撃ち合いに無我夢中でした。古年兵の指図に従い、二階の銃座に弾薬を上げたり、射撃をしました。分哨長の兵長は、トーチカの背後に迫る敵に手榴弾を投げました。夜明けまでこの撃ち合いは続きました。

救援にきた中隊が、二手に分かれて攻撃、敵は遺棄死体五を残して退却、ほっとしました。

昭和十九年初め、原部隊（第二十二師団）は南支派遣軍に転じ、南支に進軍することとなり、私は輜重馬部隊に転属、行李弾薬班の特別教育を二カ月受けまし

た。間もなく上海呉淞で乗船しました。十隻の船団の最後尾で出航、台湾基隆港に奇港、補給後出港、三日目に敵潜水艦の雷撃を受け三隻の輸送船が沈没、連隊長、軍旗の乗船も沈没、五時間後に救助艦に救われるという事件があり、つくづく運命のナセルわざを痛感しました。出航順が幸いして助かったものと思いましたが、助かった船がすぐに救助しておれば、多くの兵隊の命が助けられたのに、残った船は一目散に逃げたのには、軍隊の非情さを感じずにはおられなかったですね。

ようやく広東に到着。中山^{ちゅうざん}大学に集結した多くの部隊は、次の作戦に備えましたが、敵のスパイの通知を受けたのか、着いた晩に早速、敵空軍の大空襲があり、多くの損害が出たそうです。

兵隊は早速「タコツボ」掘りを命ぜられました。後は被爆地を見に行きましたが、その悲惨さは目を覆うばかりで、民間人の死骸が四トントラックに五台、山積みになっていました。

湘桂作戦が始まり、桂林、柳州を目指して行軍が連日強行され、携帯弾薬を持てるだけ持ち、一日二十里という昼夜兼行の進軍は、兵も馬も汗と泥まみれで続けられました。

出発して五日目、米空軍の爆撃で私は左足に破片創を受け、中隊長命で広東陸軍病院に入院加療、幸い経過良好で二週間で退院、原隊にやっと追いつきました。原隊に戻って聞いた話によりますと、私が負傷した空爆のとき、第二大隊の行李がやられ、馬十頭と兵五人が即死、負傷者多数が出たそうです。柳州作戦が約五カ月ぐらいで終わり、仏印のハノイに向けて出発しました。

昼間は空襲を避けるため休止、夕方六時ごろ出発、毎日十里の予定で行軍、仏印の山を縫って歩くため、毎夜必ず虎のうなり声を聞きながら歩く気味悪さは今でも忘れられません。夜半の十二時から、朝方の三時までが一番眠くてたまりませんでした。

前に行く馬の尻にぶつかって目を覚ます。馬も眠っているのはたまげました。終いには馬のしっぽの毛

にぶら下がる格好で歩きましたね。今思い出しても、あのときが一番苦しかったですね。

虎除けのため、小隊と小隊の間は、ぼろ布に石油を染み込ませて火を付けた松明をかざしながら行軍を続けたのですが、馬に飲ませる水をくみに出た初年兵が行方不明になり、虎に食われたらしいと噂が流れ、ぞつとしました。

ビルマ戦線に行くために、ラオスとタイの国境の山岳地帯をいったのですが、虎が出るとはびっくりしました。

ラオスのサバナケットに着いたのですが、そこで同郷の同年兵の波多野誠一君が、平常から甘いものが好きなため現地人の家で水飴をなめたのが原因で赤痢にかかり、野戦病院に入院しましたが、間もなく死亡したので残念でした。

手首を切り落として焼き、私が骨を首から下げて持ち歩きましたが、部隊に遺骨のない地層棺があったので、今は故郷の墓に納まっています。サバナケットはメコン川沿いにあり、対岸はタイ国です。

ハノイはフランスが管理していたせいか小綺麗な街でした。ちょうど着いたのが六月でしたが、アイスクリームもアイスクャンデーも売っていました。また、現地人が「つつかけ草履」を素足で履いているのに驚きました。

ドンダンの要塞を攻略したら、大隊砲が五門あるだけの要塞でした。仏軍を武装解除したのですが、水筒を拾い肩にかけたり、「つつかけ」を履いて歩いていたのですが、最初のうちは水がいっぱい入っていると喜んだのですが、そのうちに重くなって、みんな水筒を棄てる始末には苦笑するばかりでした。

―終戦はどこで、いつごろ知りましたか―

メコン川を渡ったタイのウボンです。なんの知らせもないまま八月の末ごろだと思います。三八式歩兵銃の菊の御紋章を削るようにいわれ、ヤスリを渡されました。

そのうち軍旗の奉焼式があり、整列して捧げ銃をして軍旗に別れを告げましたが、竿頭の菊の紋章は持ち

帰ったそうです。

うちの連隊旗は、昭和十五年に下賜された、新しい軍旗でしたが、万感胸に迫って涙が止まりませんでした。連隊長以下全員涙を流していました。

武装解除は英軍がきて、砲は爆破、使い残しの砲弾は川に棄て、馬は全部殺すよう命令が出たんです。馬は四、五百頭いました。

飼料の関係があつて始末に困つたからでしょうが、私ら馬部隊のものにとつては苦勞を共にしてきた馬が殺されるとは、なんと言つてもやりきれない辛さでした。大きな穴を掘つて、小隊長がハンカチに穴を開けて目隠しをして、その穴から馬の頭を狙つて拳銃で射殺したのです。支那馬は一発で死にましたが、日本馬は利口なもので、殺されるのが分かつていて、穴の側まで曳き出すのが大変でした。一発では倒れず、二発目でやっと倒れ込んだのです。強かつたですね。とても見ていられませんでした。かわいそうでした。全部殺すのに一週間はかかったことを覚えています。

私らは特別な収容所といった所には入らずに、自分

たちで竹製の小屋を造り住んでいました。英軍から労働を強要されたことはありませんでした。

ウボンからバンコク近郊のナコンナヨークに移動し、野生のバナナ林を伐り開いて兵舎造りを開始。バナナがたくさんあるので食べたらずらけでとても食べたものではありません。

太い竹を土台に、細い竹を柱、梁、床などに使い、古年兵が手際良く組み上げていく。それを手本に、骨組みから屋根は大きな葉を何枚も重ねて葺き上げ、なんとか格好つけができるようになりましたが、問題はその広さですよ。十畳あれば五、六人が普通なのに、なんと三十人が押し込まれるものだから、互い違いになつて寝ました。夜、不寝番に立つて、次の者に申し送つて、いざ寝ようとしても場所がない。仕方ないから無理矢理入り込む始末。顔に隣の者の足が当たる。ロクに洗つてないから臭くてたまらない。船に乗るまでの我慢だと諦めの夜が続きました。

床の竹に携帯した毛布を一枚敷くだけだから、背中が痛くて寝られなかったが、馴れとは恐ろしいもので、

そのうちに平気で寝られるようになりました。マラリヤの流行地なので蚊帳を吊っていました。

終戦から引揚げまで、部隊は飲料水は井戸を掘って煮沸して使いました。燃料は山へ枯れ木を採りに行く。畑を作って野菜を栽培するなど自活生活に入りました。井戸掘りは毎日どこかでやっていました。

昭和二十年五月末ころ、無電が入り、近日中に船が入ることになり、老年兵が先に帰れるとの話に補充兵たちは大喜びです。

待ちに待った船は、アメリカのリバティ船で一万トン級の大きさを城のように見える。

浦賀に着いたのは出征以来三年一カ月経った昭和二十一年七月二十五日です。三十一歳で入隊して三十四歳で復員したわけです、

その間、留守家族とは全くの音信不通ですから、皆元気なのか心配でならない。一日も早く帰りたい気持ちが吹き出してくる。戦地にいる間は帰りたいと思ったことはなかったのね。

上陸して泊まった建物は、海軍の重砲隊でした。隊

長命で世話になったお札の印に汲み取り便所の汲み取り奉仕をするようになり、穴を掘って汚物を埋める作業をやり、三百円の現金と汽車の切符、乾パンを貰い、上野の焼野原を後にしたのです。

家族は皆元気で、喜んで迎えてくれました。

先ず裸になり、服と下着は焼き捨て、「シラミ」退治をしてから自宅の風呂に入り、戦塵を洗い流し、無事に帰れた幸せを味わいました。